



# すべての若者が、幸せに働き続けられるために

「ひきこもり」「ニート」の就労支援



## 工藤 啓さん

特定非営利活動法人育て上げネット 理事長

聞き手 白井美樹 (ライター)

工藤啓さんが、NPO法人「育て上げネット」を2004(平成16)年に設立してから10年がたつ。その間、いわゆる「ひきこもり」「ニート」と呼ばれる若者たちが、社会の中で働く場を獲得し、働き続けることをサポートし続けてきた。若くして起業をするときに、当時としては異色だったこのジャンルを選び、情熱を注いできたその胸のつちを聞いてみた。

工藤さんが起業したのは、留学先から帰国した2001(平成13)年。23歳のときだった。「何をもって起業とするのかは難しい」とのことだが、個人的に若者の就労支援に関わるようになったのがこの年になる。若くして、このテーマを追求するようになったのは、海外留学で何を学び、どんな経緯があったからなのだろう。

工藤 もともとは日本の大学に通っていたのですが、大学の長期休暇を利用して、よく海外旅行に行っていました。各国を巡り、たまたまシアトルで出会った仲間、台湾人のグループが

いたのです。「なぜ、アメリカに勉強に来ているのか」と尋ねたところ「実際、いつ中国との戦争が勃発するかもしれない。そうなったときに、アメリカの市民権を得ていたら家族や親戚をアメリカに逃すことができる」と答えただけです。

お互いに19歳くらい。その年齢で外交問題を考え、家族の将来まで考えているということに、大きな衝撃を受けましたね。なぜかわからないけれど、「彼らとしばらく人生を共にしたい」と強く思うようになり、日本の大学を中退して、シアトルのカレッジに留学を決めたのです。

## PROFILE

●くどう・けい●

特定非営利活動法人育て上げネット理事長。2001(平成13)年、若者就労支援を専門とする任意団体として設立。2004年(平成16)NPO法人化。著書に「NPOで働くー社会の課題を解決する仕事ー」(東洋経済新報社)、「大卒だって無職になるー“はたらく”につまずく若者たちー」(エンターブレイン)など。金沢工業大学客員教授、東洋大学非常勤講師。内閣府「パーソナルサポートサービス検討委員会」委員、東京都「東京都生涯学習審議会」委員等歴任。

「シアトルではどんなことを学んでいたのですか。若者の就労支援をしようと思ったきっかけは？」

工藤 進学したのが、コミュニティカレッジのビジネス学部会計学科。語学力の問題もあり、その科に進むことにしたのです。そこでの学風に触れてい

ると、「起業する」ということが特別なことではありませんでした。いろいろな国から、起業したいというひとびとが集まってきて、学んでいるという環境だったからです。

若者の就労支援というテーマに関心を持つようになったのは、欧州からの留学生の情報が大きく影響しました。すでにドイツやイギリスでは働くことの問題が起きており、企業での大リストラが進んで、そのしわ寄せが、若者に及んでいるということです。

「3～5年もすれば、必ず日本も同じ状況になるはず」というドイツ人の友人の言葉を確信することができました。そこで、アメリカの大学への編入の予定を取りやめ、急ぎよ帰国して就労支援に踏み出したというわけです。

―帰国して、まずはどんなことから取り掛かったのでしょうか。

―者が、正規社員になるための応援を始めたのです。

―実際に職探しに困窮する若者と現場で対峙するようになって、どんなことを感じられましたか。

**工藤** たとえば、ハローワークに来る人は、どんな仕事を探したいか目的がはっきりしています。でも、ヤングジョブスポットに来る若者は、まだどんな方向に行こうかということも明確になっていないのです。

―そこで、ここに来た若者をスタッフとして雇用し、働きながらやりたい仕事を見つけないかという方策をとりました。でも、私がここに携わっていたのは、結局8カ月だけでした。

―それほど早く所長を辞めたのは、なにか理由があったからですか。

**工藤** 帰国したものの、実際「この分野に人の関心が集まるのか」「社会問題化できるのか」という不安はありましたね。そこで、とりあえずマーケティングの一貫として、シンポジウムを開くことにしました。1年半くらいをかけて、全国の主要都市で「就労支援フォーラム」を開催したのです。

―反響はいかがでしたか。

**工藤** 会場は、だいたい1000～2000人くらいが入れる貸し会議室だったのですが、いつも満席に近かったです。有料のシンポジウムでしたが、地方行政の人や議員も来たり、さまざまなメディアも取り上げてくれました。もちろん、子どもの自立や就労問題に困っている保護者や親族も多数来場しました。

―こうしてシンポジウムを続けるうちに、このテーマに関して、社会的に潜

在的な関心が高いことということがわかりましたね。

―シンポジウムをやっている、若者の就労支援ということで、事業的な展開はありましたか。

**工藤** あるとき厚生労働省から1本の電話がかかってきたのです。何か怒られるのかなと思いましたが、実際は、当時の担当者からヒアリングを受け、ある仕事をオフアールされたのです。2003（平成15）年といえば、日本において若者支援がスタートしたくらい。厚生労働省の人いわく、「全国14カ所に、フリーターを支援する施設を造ります。運営に手を上げてみませんか」というのです。

―いい機会なので、この話を受け、横浜駅前のビルに設けられた「ヤングジョブスポットよこはま」の所長になりました。フリーターや暫定雇用の若

**工藤** 私が本当に支援したかったのは、ひきこもりやニートなど、働きたいけど働けない若者たちだったからです。また、横浜は私の家からだいぶ遠いという難点もありました。そのため、ヤングジョブスポットは、コアメンバーのスタッフに運営を任せ、家から近い立川でNPO法人育て上げネッ

トを設立したのです。それが2004（平成16）年のことになりました。

―現在は社員が約100人もいると聞きました。当初はどんな感じでした。ターゲットはどのようでしたか。

**工藤** 最初は、常勤のスタッフが3人



だけでした。初年度の売り上げが約900万。これでは、3人のスタッフが食べられるわけありませんでした。しかし、事業が時流に乗ったので



た男性も、このタイプでした。大学を中退して、家にひきこもってPCでコードばかり書いていたので、心配した親が育て上げネットに連れてきたのです。

この男性を、IT企業の社長をして知る知人に紹介してみました。この会社は、米系特有の能力主義で、対人的なコミュニケーションをあまり重要視されることがないので、彼に向いているのではないかと思ったのです。結果は、インターシップ期間を経て、正社員になり、今では私たちのスタッフよりも高給取りになっていますよ(笑)。

日本はまだまだ、履歴書ありきの就活しか認められない社会。彼のように大学中退で、ひきこもっている期間が長ければ、大手企業への就職は難しいでしょう。でも、そういう人材は、実は社会の中かなりいるのです。

—そういう光る原石を、社会へ橋渡し

しよう。共感してくれる人や企業も増えていき、どんどん組織的に大きくなっていきました。

一見すると順風満帆のように見えましたが、一度大きな経営上の危機に瀕しましたね。2006〜2007(平成18〜19)年ごろのことです。会社員の経験がなかったこともあり、資金の流れに無頓着で、どんぶり勘定でやっていたのが原因です。

私自身は、育て上げネットにやってくる若者と関わり合うことが好きでしたが、危機を脱出するために現場を離れて、徹底的に事業構築を始めました。それまでは、企業からの求人オファーやタイアップも、オーダーメイドで応えていましたが、組織が大きくなって一つ一つにフルパワーで応じられない次元にきたのを知り、パッケージプランも作っていきました。

これにより、なんとか経営は安定し、法人化してから無事に10周年を迎える

するのが、工藤さん率いる育て上げネットの仕事なのです。育て上げネットに訪れた若者は、どれくらいで社会の一員になれるのでしょうか。

**工藤** だいたい半年から1年くらいで仕事に就いていく人が多いですね。その割合はおよそ90%近くにのぼります。しかし、我々が力点を置いているのは、単に就職できたということではありません。その後も働き続けられるかどうかを重要視しています。そのために、ジョブトレという支援事業を行っています。

これは、昼夜逆転の生活を送っていたり、人づき合いの苦手意識が大きかったり、アルバイトを始めても長続きしない若者たちのための就労基礎訓練プログラムです。それぞれの悩みや希望に応じて、個別に課題を設定しながら、グループの中で継続的なメニユーに取り組んでいきます。

ことができたのです。

—支援した若者の中で、印象的だった事例はありますか。

**工藤** この10年で支援した若者は約8千人にのぼります。もちろん、そこには8千通りの旅のストーリーがあります。

特に印象に残るのは、理科系の大学を中退し、職につけないうでいた若者たちですね。彼らは、大方がプログラマー気質で、PCでコードを書いたりする高い能力を持っています。ところが、コミュニケーションにおいては、「笑いごとれる」「オシヤレである」「イケてる」などが評価の対象になる場合があります。すると、いくらプログラミングの才能があっても、コミュニケーションから引き出されてしまうケースが見られました。

26歳で、育て上げネットにやっつき

これによって、少しずつ就労に向けて、また継続就労に向けてステップアップしていきます。育て上げネットのスタッフのサポートだけでなく、他の支援機関や団体、行政、企業の連携も含め、包括的な支援をするようになっていっています。

—ジョブトレには、毎日通うのですか。

**工藤** ジョブトレに参加するのは、本人の希望で週に何回でもいいことになっています。でも、最初は週に3回だった若者も、だんだん来る回数が増えていくようです。

実は、人は、行くところがないと辛いです。「行くところがある」「やることがある」というというのは、人にとって貴重なことなんです。そう考えると、ジョブトレはひきこもりだった若者にとって、最初の社会的所属の場としても機能しているのではな

いかと思います。

—無事に就職した若者たちとは、その後もつながっているのですか。

**工藤** はい。忘年会やフットサル大会など、年に数回、集う機会を設けています。また、就職後に何かトラブルがあれば、その若者と一緒に企業を訪れて話を聞き、企業に改善を求めたり、あるいは別のキャリアを相談したりするのも育て上げネットの仕事の一環です。若者たちが、ずっと幸せに労働市場にいられるようにするのが、そもそもの目的だからです。

—ところで、工藤さんは何か新しい取り組みを現在考えていますか。

**工藤** 今まさに構想を固めつつあるのが、海外との連携です。

中高年のリストラが進み、若者へし

若者の就労支援は進めていく予定です。現在は、大学進学よりも就職希望率の高い140の公立高校に、育て上げネットのスタッフが講義に行っています。提携の進んでいる高校では、職員室の中にデスクを置かせてもらい、先生と一緒に進路指導をするようになっていきます。

—ところで、工藤さんご自身のプライベートなトピックスは何かありますか。

**工藤** 実は、2歳と0歳の子どもがいるのですが、第二子ときには2カ月、第二子ときには6週間の育休をとりました。その間、オフィスにはまったく顔を出しませんでした。自分がいなくても、あまり影響がないという状態を作りたかったからです。

NPO業界はまだ新しく、企業のように世代交代をするような時期にまだ



わ寄せが起こり、正規の採用が抑制されるという傾向は、世界的なトレンドになっていきます。留学時代にすでにドイツやイギリスで起こっていたことが、やはり数年後に日本でも起きました。そして、今では東アジアにもそのトレンドが拡がりつつあるのです。類似の問題を抱える国は、育て上げネットがやっていることに深い関心を

示しています。現に、日本まで視察に来る国もあるし、私自身はこの2〜3年韓国を頻繁に訪れ、講演を行っています。

我々がやってきたことは、もしかすると東アジア全体の問題なのかもしれませんが。現在、少しでも情報提供できればと準備を進めています。

もちろん、日本においても、さらに

さしかかっています。なので、どうしたら上手く世代交代していけるかということが、今後の課題となってきました。

それに必要なのは、代表者への依存度をどれだけ縮小できるかです。そこで、育休でいなくなったらどうなるかと試してみました。その結果、自分が10やっていたことが0になれば、新しい10が生まれる……という確信を得ましたね。

ちなみに、私自身は、育休はとても楽しく過ごしました。加えて、若い男性が昼間働いていないで家にいると、社会がどんな目線を持つかがわかり、おぼろげながらもひきこもりやニートの心情がわかったような気がしましたね。

—現在36歳で、理事長としてはまだまだ若いですが、やがて40代、50代になったときはどういう風になっていると思

いますか。

**工藤** 国内はもちろん、海外にも何か貢献ができていたらいいと思います。そのときには、必ずしも現在の立場でなくてもいいと思っています。いちスタッフとしてここで働いているかもしれないし、違う会社で働いているかもしれない。でも、理想は、いつかこの活動が社会的に必要なものとなり解散することですね。

育て上げネットは、そもそも社会問題を解決するために立ち上がった組織です。その社会問題がなくなれば、解散するのが道理で、そこが利潤を追求する一般企業と大きく異なる点です。

「育て上げネットがいかになくなるか、いかに発展的に解散するか——このことを常に心のどこかで追及していきたい」と工藤さんは言葉に力をこめた。